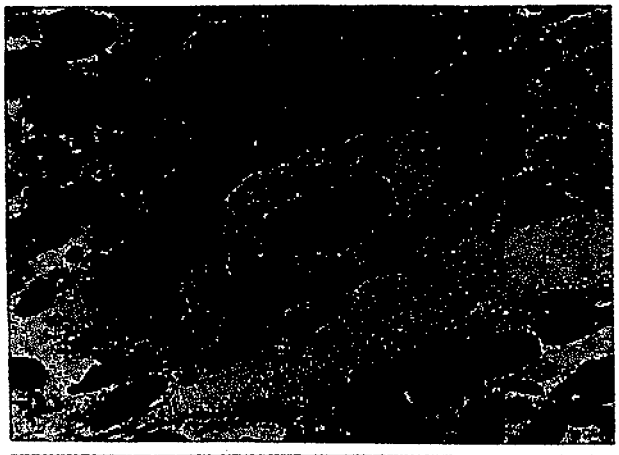
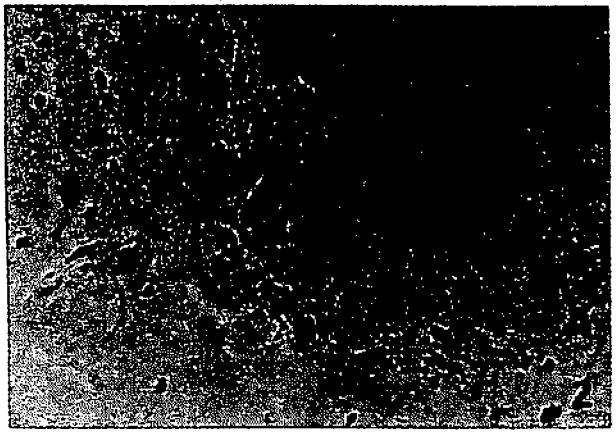
豚の黒色腫

第19回獣医病理学研修会標本No.306　　岐阜大学農学部獣医学科家畜病理学教室出題





動物：豚，ハンプシャー種，雌，194日令

臨床事項：出生時，外見上の異常はなかった。生後3ヵ月頃から同腹10匹のうち本例だけに「さし毛」が増え，ハンプシャー特有の黒毛の部位が「ごま塩」のようになり白帯も不明瞭になった。発育はやや不良で，生後193日で90.5kgであった。

剖検所見：屠殺し，湯剝ぎ後の観察で，背部の脂肪，肝臓，脾臓，肺，心臓，膵臓，甲状腺，舌，胃，小腸，横隔膜，骨格筋に米粒大から小手挙大の黒色腫瘍病巣が見られた。腸間膜および肺門リンパ筋は腫大，黒変していた。硬度はやや軟ないしやや硬であった。

組織学的所見：組織学的検索において腫瘍病変は，皮下織，肝臓，脾臓，肺，心臓，甲状腺，舌，胃，小腸，横隔膜，所々のリンパ節などに認められた。黒色腫瘍病巣は実質臓器では間質結合組織に沿って，胃や腸管では粘膜固有層に沿って浸潤増殖していたが，肝臓においてはかなり明瞭な蜂巣構造を形成して浸潤増殖していた。黒色腫瘍病巣の中心部は応々にして壊死および石灰化に陥り，メラニン色素顆粒塊を形成していることもあった。皮下織のリンパ管，小動脈腔内に腫瘍細胞が認められた（図1：皮下織，メラニン漂白後H－E染色×400）。多くの腫瘍細胞はメラニン色素顆粒をよく充満した多角形ないし円形の細胞で，比較的大きな明るい円形の核を有し，1コないし2コの明瞭な核小体を有していた。これらの腫瘍細胞は多核巨細胞化していることがあり，皮下織，肺，心臓，頸部リンパ節にとくに多数認められた（図3：肺，メラニン漂白後H－E染色×400）。臓器や腫瘍の部位により，細胞質内にメラニン色素顆粒を豊富に充満した凝縮，濃染する核を有した腫瘍細胞が多数見られた（図2：肝臓，メラニン漂白後H－E染色×400）。腫瘍細胞にはかなり著しい多形性や大小不同が認められ，核のクロマチン量もかなり変化に富んでいた。脾臓，リンパ節などの細網内皮系組織に富む臓器では，細網細胞の分裂増殖が旺盛で，メラニン色素顆粒の貪食が認められた。

病理学的診断：著しい腫瘍病巣は皮下織，頸部リンパ節，肺，心臓，胃底部に存在し，文献上豚の皮膚黒色腫が散見される。また腫瘍細胞の広範な分布，リンパ行性および血行性転移，浸潤性増殖，病巣中心部に壊死および石灰化が認められる反面，一見上皮細胞を思わせるようなメラニン色素顆粒をよく充満した比較的成熟型を示す腫瘍細胞や腫瘍細胞にほとんど核分裂像の見られない点が列挙され，本症例の診断は，前半身皮膚に原発したであろう比較的良性の悪性黒色腫と思われる。